

スポーツ指導者のコンピテンシーに関する研究

The Study on Competency of Sports Coaches

スポーツクラブマネジメントコース

5011A319-7 長澤 淑恵

研究指導教員 間野 義之 教授

I. 緒言

1. 背景

日本の女子ソフトボールは、2008 年の北京五輪で金メダルを獲得し、世界でトップレベルであることを証明した。その背景には、日本女子ソフトボールリーグ（以下、日本リーグ）の存在が大きいと考えられる。日本リーグは、規模や開催期間、チーム数、試合数、さらには報酬面などにおいて世界一のシステムを誇り、これらは企業努力の上に成り立ってきた。またソフトボールは、バレーボールなどと並び、日本の女子スポーツの草分け的存在の一つでもあった。

北京五輪で一躍脚光を浴びた女子ソフトボールではあったが、他の実業団スポーツと同様に、不況のあおりを受けた企業が、スポーツチームの存続を断念する事態に直面している。さらに、2008 年の北京五輪を最後に、女子ソフトボールが五輪種目でなくなったことも、日本の女子ソフトボールの衰退に拍車をかけている。

本研究では、女子ソフトボールの「今後」を検討する一つの手がかりとして、ソフトボール育成期にあたる高校、大学で指導をしている指導者（監督）に着目することとした。

2. 課題

日本における国際的なソフトボールの発展は、日本リーグ加盟チームの選手や大学生によって構成された日本代表チームの活躍によるところが大きい。日本リーグの選手たちのほとんどは、学校部活動出身の選手であり、そこでの経験は、競技継続への意欲と関連しているものと考えられる。しかし、これまでのソフトボールに関する研究や報告では、動作解析やゲーム分析に関するものがほとんどで、指導者の意識やコンピテンシーを検証した研究は皆無に等しい。

ソフトボールの指導者は、専門的にソフトボールに携わった経験のない指導者が比較的多く存在する競技でもある。しがたって、指導者の育成という側面から競技を発展させていくことが、日本のソフトボール界において重要な課題であるとも言えよう。

3. 目的

本研究では、トップレベルを目指す選手の育成期にあたる、高校や大学における指導者のコンピテンシーを明らかにすることとした。これにより、ソフトボール指導者が、どのようなことを心がけて指導を行い、その指導が競技成績と日本女子ソフトボール 1 部リーグ（以下、1 部リーグ）への選手輩出にどのように結びついているのか、その特徴が明確になると考えた。

II. 方法

1. 質問紙作成の為のインタビュー調査

1) . インタビュー対象者

女子ソフトボール日本代表チームの監督を経験したことのある監督 3 名。

2) . 実施期間

2011 年 8 月中に行った。

3) . 調査方法

質問内容は「選手を指導する際に大切にしていること」について非構造化でのインタビューを採用した。

4) . キーワード抽出および質問紙の作成

インタビュー調査から質的コーディングを行い項目を抽出、9 つのカテゴリーに分類し、さらに 29 項目の質問の内容を検討した。これらを測る尺度を「スポーツチームマネジメント自己評価尺度」と命名した。

2. アンケート調査

1) . 調査方法

過去 10 年間に全国大会に出場したことのある高校・大学の女子ソフトボールチームの指導者（監督）および日本リーグに選手を輩出している高校・大学の指導者（監督）111 人を対象とし、郵送による質問紙調査を実施。「スポーツチームマネジメント自己評価尺度」を 7 件法で評定した。有効回答は 94 人（84.9%）であった。統計処理にあたっては IBM SPSS Statistics19 プログラムを用いた。

2) . 実施期間

アンケートの発送は 2011 年 10 月 4 日であり、同 11 月末日までに回収した。

Ⅲ. 結果

1. 女子ソフトボール指導者のコンピテンシー

1). インタビュー調査による質的コーディング

女子ソフトボール指導者のコンピテンシーは、インタビュー調査の対象者3名より抽出された91のキーワードをもとに「モラル」、「柔軟性」、「コミュニケーション」、「モチベーション」、「組織」、「理論」、「スキル」、「戦略」、「人心掌握術」の9つのカテゴリーに分類された。

2). アンケート調査によるコンピテンシーの分類

スポーツチームマネジメント自己評価尺度の29項目について主因子法に基づく因子分析を行った。分析の結果、固有値の値から判断し、8因子を採用した。これらの因子に対し、重みなし最小二乗法、プロマックス回転で因子分析を行い、「観察」「モラル」「コミュニケーション」「啓発」「戦略」「動機づけ」「基本練習」「組織形成」とそれぞれ命名した。

2. 女子ソフトボール指導者の特徴

1). 成績優秀指導者

全国大会でベスト4以上の成績（以下、入賞群）を収めている指導者と入賞群以外（以下、非入賞群）の指導者のコンピテンシーを比較するために、t検定を行った。結果はTable1に示す。分析の結果、「観察因子」($t=2.41$, $df=92$, $p<.05$)において、入賞群の指導者が有意に高値を示した。その他の因子に関しては、有意な差は認められなかった。

因子	t値	入賞群(n=41)		非入賞群(n=53)		t検定	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	F値	有意差
観察	2.41	30.66	2.75	29.04	3.56	1.975	.018*
モラル	1.48	26.80	1.68	26.28	1.71	.254	.143 ^{n.s.}
コミュニケーション	-1.56	18.46	1.67	19.04	1.84	1.655	.122 ^{n.s.}
啓発	0.96	24.05	2.30	23.55	2.68	1.965	.341 ^{n.s.}
戦略	1.34	18.00	1.58	17.45	2.37	8.292	.183 ^{n.s.}
動機づけ	0.62	12.00	1.57	11.75	2.15	1.100	.540 ^{n.s.}
基本練習	1.57	18.27	2.37	17.58	1.87	2.027	.121 ^{n.s.}
組織形成	0.40	24.63	2.50	24.43	2.28	.000	.687 ^{n.s.}
						n.s.: not significant	
						* $p<.05$	

因子	t値	輩出選手あり群(n=59)		輩出選手なし群(n=35)		t検定	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	F値	有意差
観察	2.74	36.12	4.08	33.71	4.16	2.483	.007**
モラル	3.50	33.44	1.77	31.91	2.19	4.237	.001**
コミュニケーション	0.96	29.83	2.90	29.23	3.05	6.031	.342 ^{n.s.}
啓発	0.01	12.12	1.58	12.11	1.43	1.313	.989 ^{n.s.}
戦略	3.03	12.36	1.37	11.46	1.42	1.686	.003**
動機づけ	1.29	24.92	2.39	24.23	2.68	.293	.201 ^{n.s.}
基本練習	0.19	17.92	2.18	17.83	2.04	.001	.849 ^{n.s.}
組織形成	1.02	12.02	1.69	11.60	2.24	7.032	.309 ^{n.s.}
						n.s.: not significant	
						*** $p<.001$	
						** $p<.01$	

2). 日本女子ソフトボール1部リーグ輩出指導者

2011シーズンの1部リーグに、指導した選手がいる指導者（輩出選手あり群）といない指導者（輩出選手なし群）のコンピテンシーを比較するために、t検定を行った。結果はTable2に示す。分析の結果、

「観察因子」($t=2.74$, $df=92$, $p<.01$)、「モラル因子」($t=3.50$, $df=92$, $p<.001$)、「戦略因子」($t=3.03$, $df=92$, $p<.01$)において、輩出選手あり群の指導者が高いという有意な差が認められた。

Ⅳ. 考察

1. コンピテンシー尺度について

本研究では、漠然とした「指導力」という考えを、数値化し客観的評価ができるようにすることで、どのような指導者の態度や信念、行動が、結果としてチームの実績や高い競技レベルの選手輩出につながるのかを明らかにすることを目指した。インタビューによって抽出されたコンピテンシーとアンケートによって抽出されたコンピテンシーは、多少異なるかたちで因子が抽出された。ただし、二段階の調査方法で項目が作成されたことから、比較的妥当性、信頼性のある尺度を抽出できたと示唆される。

2. 好業績を生む要因

入賞群と非入賞群との比較において、全国大会ベスト4以上の実績を有するチームの指導者は、選手一人ひとりの性格や変化などをよく観察し、それに基づいて適切な言葉がけや技術指導が行われていると推察された。

次に、「1部リーグに選手を輩出しているか否か」という視点からも検討した。「観察因子」の他に「戦略因子」が有意に高値を示したのは、指導者がソフトボールを継続していこうとする意欲を持つ選手を育て、また1部リーグでやっていけるだけの競技力を身につけさせたことを部分的に示唆していると言える。同様に、「モラル因子」も有意に高いことが確認された。「モラル」を指導することが、高いパフォーマンスを発揮する選手育成の要因となるのか、または「モラル」を指導し、実践できるようになるからこそ、それが競技力に繋がるのか、本研究では明らかにすることはできなかった。

Ⅴ. 結論

高校・大学の全国大会レベルにおける、女子ソフトボール指導者のコンピテンシーは、入賞群・非入賞群において大きな差はなかった。しかし、「観察因子」を重要視している指導者が比較的好成績をおさめているということが明らかになった。本研究では、対象が全国大会レベルということもあり、指導者の意識自体が高いと推察され、8因子29項目すべてにおいて重要視することが大切であることを考えさせられた。